

加藤幸治編

浜の棟梁・鹿井清介が撮影したくらしと祭り

—— 鮎川浜 1950年代 ——

鮎川浜の「黄金時代」の古写真と浜の棟梁・鹿井清介

加藤幸治・佐藤麻南*

写真引き 60年前の鮎川浜のすがた

鹿井清介・加藤幸治・成澤正博**・佐藤麻南

加藤幸治ゼミナール3・4年生



水中スターマインと捕鯨船（1962年頃の牡鹿鯨祭り）

*東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程

**鮎川の風景を思う会代表

鮎川浜の「黄金時代」の古写真と 浜の棟梁・鹿井清介

加藤 幸治・佐藤 麻南

1. 鮎川浜の「黄金時代」

三陸の南端に位置する宮城県石巻市牡鹿（おしか）地区。半島と離島とで構成されるこの地域は、黒潮と親潮が会う世界屈指の漁場「石巻金華山沖」にほど近く、近代漁業の最前線に位置する。明治中期まで、牡鹿半島の漁浦は、磯根漁業と網漁を中心とした地先の漁業と、小規模な農業による半農半漁の生活であった。内湾が比較的大きく、少ないながらも平地を耕作できる小淵・給分浜と、荻浜、裏浜側に位置する寄磯浜、半島の先端に近い十八成浜・鮎川浜といった集落はそうした生産基盤にあり、その他の浦々はより零細で、離島は流刑地であった。

明治後期に入るとその様相は一変する。牡鹿半島は、近代捕鯨、遠洋漁業、大規模定置網といった産業的な漁業によって、それまで想像もできないかたちで発展した。半島の入り組んだ地形にはいくつもの捕鯨会社の事業所が進出し、大屋根の解剖場に付随して加工場や肥料工場などが軒を連ねた。とりわけ鮎川港は、鯨油や鯨肥の製造を目的とした複数の捕鯨会社の拠点となり、湾内には大型のキャッチャー・ボートがひしめき合っていた。栈橋には食肉目的の沿岸捕鯨のためのミンク船や、金華山や石巻、離島をむすぶ客船が忙しく出入りし、町には旅館や映画館、ダンスホール、バー、玉突場、料理屋、銀行、様々な商店などが軒を連ねるほどの賑わいであった。離島は遠洋漁業の前線基地となり、他の漁浦も遠洋漁業の餌をとるための漁業で活況を呈した。

その賑わいがピークに達したのは、一九五〇年代半ば、昭和二〇年代末期から三〇年代である。戦後の食糧難の時代を支えることで大きく発展した捕鯨事業と、巨大資本の漁業会社による世界の海での遠洋漁業、大謀網の伝統を引き継ぐ大規模定置網は、鮎川浜を大いに発展させ、鮎川浜の人々にとっての“黄金時代”として記憶されている。

この時期、ひとびとの暮らしにカメラをむけた一人の若者がいた。この報告書で紹介する民俗写真を撮影した鹿井清介さんである。鹿井さんの家族は、仙台空襲から命からがら逃れ、牡鹿半島の突端に位置するまさに寒村とよぶにふさわしい小集落、山鳥に居を構えた避難民であった。そこから再出発して、親子二代にわたって大工として活躍し、住宅や作業小屋などはもちろん、「唐桑御殿」に真っ向勝負して建てた邸宅まで、人々の信頼も

篤い浜の大工である。

ひと息ついて“お茶っこ”中の大工の家族、沖ではたらく大謀網の網子たち、一攫千金を夢見る捕鯨船の男たち、腰まで水に浸り旬のものを採る女たち、金華山の太祭でチョーサイ!の掛け声とともに神輿を担ぐ男たち…。鹿井さんがカメラを向けたのは、ふつうの人びとであった。当時の鮎川浜のエネルギーを、追体験できる一連の写真の魅力は、昭和二九～三〇年に撮影された草創期の「鯨まつり」に凝縮されている。内容は、実に盛りだくさん。特大スターメインが捕鯨船越しに上がる花火大会、爆音を轟かせる捕鯨砲の模擬射撃、鮎川浜の町ごとの婦人会の仮装行列や踊りの競演、そこに牡鹿半島の表浜、裏浜の女性たちも参戦する、手作りのミス・コンテスト、演芸大会や歌謡ステージ、軒を連ねるテキヤの物売りの呼び声。鹿井さんの写真には、数えきれない人びとが同じものを見て笑っている顔が印象的である。鮎川浜の賑わいの絶頂期に、鹿井さんが撮影した写真は、四〇〇枚を超える。

大学生たちが親しみを込めて「鹿井写真」と呼んできた、これらの写真は東日本大震災後の復興まちづくりにおいて意味を持ち始めている。津波によって壊滅した町並みが、かつてどのような姿であったか。「鹿井写真」は過去と現在を結びつける地域の賑わいのイメージのよりどころとして、中高年の世代にとっては懐かしい感慨を、若者にとっては新鮮なおどろきを与えてくれる。

「鹿井写真」からの特徴は、写真による芸術を目指したものではなく、また戦後社会の現実を切り取ろうというリアリズム写真でもない、現場の在りようを広く伝える使命を帯びた報道写真でもない、つまり写真行為における思想に縛られていないところにある。奇をてらった構図や、意図的に作り出したような躍動感とは無縁な表現で、親しい隣人や家族のそのときを記録し、撮った写真を焼き増しして共有するためのコミュニケーション・ツールとして、鹿井さんはカメラに親しんだ。東日本大震災後、筆者と大学生たちによる鹿井写真と民具の民俗展示を被災地で何度も開催するなかで、人びとの多くが語ったことは、「鹿井さんがこんなに写真を撮っていたなんて知らなかった」というものであった。新聞やテレビにとりあげられても決して奢らず、ましてや写真家をきどってみせるようなこともなく、鹿井さんは展示の来場者に対して楽しげに当時の様子を語りながら微笑む。(加藤)

2. 「鹿井写真」を活用した復興キュレーション

東日本大震災では、人的被害のみならず、公的機関や博物館等に所蔵されていた歴史、文化、自然に関するコレクション等も数多く被災した。資料を救援する被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）において、東北学院大学博物館は石巻市の旧牡鹿町が蓄積してきた考古、民俗、地学の資料と、古文書や歴史の調査資料の救援、応急処置、整理作

業に大学生たちとともに従事し、その作業は現在も継続中である。石巻市鮎川で行われた文化財レスキュー活動は、石巻市牡鹿公民館およびその文化財収蔵庫、おしかホエールランド（自然史と捕鯨の博物館）で行われ、地域史研究や『牡鹿町誌』の編纂事業によって形成されたコレクションが、一部は津波で流失したものの、その大半が残された。地域の文化資源を救援する文化財レスキュー活動に加え、学生たちのアイデアによる応急処置を終えた被災資料の展示会や移動博物館、ワークショップ等を実施し、復興していく地域社会に過去の文化や歴史の素材を提供したり、その面白さを提案したりする文化創造活動、すなわち復興キュレーションを実施してきた。その活動において、文化財を復旧する作業から、本格的な復興キュレーションに移行していく契機となったのが「鹿井写真」の“発見”であった。

二〇一四年八月一日、わたしは被災地での民俗調査で連携してきた北海学園大学人文学部の岩崎まさみ教授を講師に招き、「鮎川における地域文化としての捕鯨」と題した公開講演会を企画した（東北学院大学東北文化研究所公開学術講演会）。この会場で出会ったのが震災当時の石巻市牡鹿総合支所長で、退職後の現在は鮎川の風景を思う会の代表をされている成澤正博氏であった。成澤氏は、現役時代に二〇〇七年全国捕鯨フォーラムの石巻市への誘致にともない、地域住民から牡鹿半島の古写真を収集していた。成澤氏は、それを使って震災で失われた町がこれまで捕鯨を行ってきたことを地域の子どもたちに見せて誇りを持たせたいという願望をもっており、さっそく学生たちと写真の整理に取り掛かった。成澤氏が収集した写真のなかで「鹿井写真」はひときわ生き生きと人々のくらしの営みを伝えていた。



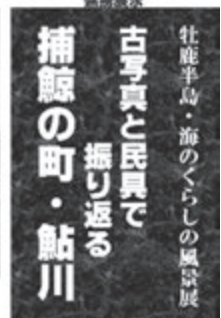
そのときわたしたちは、鮎川浜の最大のイベントである牡鹿・鯨まつりへのお手伝いをするようになっており、捕鯨会社

の外房捕鯨の大壁孝之所長から、東北学院大学の大学生にブースを確保していただいていた。学生たちは、「鹿井写真」を使って、二〇一四年一〇月五日開催の牡鹿鯨まつりの会場で実施する、写真展「底抜けに楽しい！ 六〇年前のクジラ祭り」を企画した。また、宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）で、写真展「古

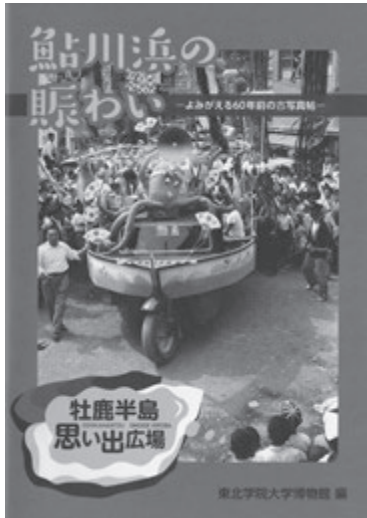
捕鯨で学んだ牡鹿半島・鮎川のおもかげ



サンファン館・東北学院大学博物館
（宮城県長使節船ミュージアム）
写真展



平成26年 10月11日(土)～10月26日(日)
宮城県長使節船ミュージアム（サン・ファン館）
〒982-8501 宮城県石巻市鮎川1-1-1 東北学院大学博物館
TEL: 0225-24-2216 http://www.compsun.jp/



写真と民具で振り返る「捕鯨の町・鮎川」を二〇一四年一〇月一一～二六日まで開催した。この展示は、加藤ゼミOGの中澤希望学芸員の協力のもと、捕鯨の最盛期でもある昭和三〇年頃の捕鯨船と捕鯨会社の写真を展示した。

サンファン館での展示会場では、牡鹿半島の浜で被災し石巻地区の仮設住宅に入居したり、石巻地区に転居したりしている方々と、展示会場でお話することができた。そのなかで、牡鹿半島では、浜にある実家に加え、子どもが石巻市内の高校に通うタイミングで石巻市内にも住宅やマンションを用意する人が少なからずいることや、網地島や田代島といった離島から石巻市内に移住した人々の集住地域に、震災後の避難者も居住している場合があることなどを知った。そして、牡鹿半島の鮎川浜だけでなく、石巻地区内で展示をしてほしいという要望もいただいた。そんな折、たまたま大学生らとともに昼食のために訪れたイオンモール石巻で、店内のいくつもの休憩所が浜の出身者のおしゃべりの場となっているのを目にした。そこで、イオンモール石巻でのイベントを企画して店舗側と交渉し、「牡鹿半島・思い出広場」と題した展示を二〇一五年二月九日～一五日の日程で実施することとなった。この会場のステージで実施したトークイベント「ayu café 鮎カフェ」は、鮎川の風景を思う会の成澤氏とボランティア団体のPikari支援プロジェクトの遠藤太一氏とのトーク形式で、会場に来ていただいた牡鹿半島の方々を巻き込んでおしゃべりするイベントとして開催した。この展示には、のべ五〇〇名が来場し、多くの石巻地区在住の牡鹿半島出身者に楽しんでいただいた。この展示をもとに作成した「鹿井写真」のパンフレットが東北学院大学博物館編『鮎川浜の賑わいーよみがえる60年前の古写真帖ー』（同館、二〇一五年三月二〇日）であった。

二〇一五年八月九～一二日、石巻市牡鹿保健福祉センター清優館を会場に文化財レスキュー企画展「金華山と鮎川浜の歩んだ近代」を開催した。この展示では「鹿井

写真」のなかから、とくに牡鹿半島沖に浮かぶ神体島である聖地・金華山への信仰や生活のかかわりを示す写真と、戦前の絵葉書やガイドマップの資料、金華山の祭の古写真と昭和中期のニュース映像などを展示した。

二〇一六年二月七～一一日、イオンモール石巻で二回目となる展示「牡鹿半島・思い出広場」は、展示での聞き取りのデータをもとに企画した新たな展示であった。今回の展示では、二〇一五年度のそれまでの展示会で集められた聞き取りデータのなかからフィードバックする方たちで企画を進め、鮎川浜におけるスポーツと生活とのかかわりにスポットを当てた。「鹿井写真」には、今では信じられないほど盛大な運動会、そこで活躍するお父さんたち、女性たちが地区ごとに競い合って出す鯨まつりのパレードでの踊り、十八成浜の海水浴場の賑わいなど、人々のいきいきとした暮らしの営みをみることができる。この展示には期間中のべ八〇〇名余りの来場者があり、写真をもとにした多くの暮らしのエピソードのデータを得ることができた。最終日には、イオンモール石巻の太陽の広場の特設ステージを会場に、昭和三陸津波以前の写真と「鹿井写真」を比較するという内容で「Ayu Café（鮎カフェ）」を開催した。この企画をパンフレットにしたのが、東北学院大学博物館編『躍動する身体—よみがえる60年前の古写真帖Ⅱ—』（同館、二〇一六年二月七日）

二〇一八年六月一三日（水）～七月九日（月）、石巻市教育委員会と東北学院大学博物館の共催で、石巻市指定文化財「旧観慶丸商店」を会場に文化財レスキュー企画展「おもひで写真帖」を開催した。この展示は、大学生が作成した東北学院大学博物館編『おもひで写真帖～今、蘇る鮎川～』（同館、二〇一八年三月三十一日）をもとにしたもので、「鹿井写真」をもとに町並みの変遷をテーマにした。（加藤）



3. 鹿井清介さんの人生から鮎川を振り返る



鹿井清介さん（撮影：佐藤麻南）

鮎川で大工として数多くの家を見て、趣味のカメラを片手に鮎川のひとびとの暮らしを、華やかだった街の風景を収めてきた鹿井清介さん。今回この報告書に掲載する写真を撮影した人物である。1932(昭和7)年12月3日生まれの現在86歳である。ここでは鹿井さんのこれまでの人生とともに捕鯨で栄えていた頃から現在に至るまでを振り返る。

3.1 生い立ちから鮎川に来るまで

鹿井清介さんは仙台市青葉区北材木町、現在の春日町の生まれで、1945(昭和20)年7月に仙台空襲で焼け出されるまで仙台で暮らしていた。鹿井さんは鹿井家のひとり息子として生まれ、祖父、父ともに大工であった。しかし、不況の影響で大工では食べていけず、鹿井さんの父・忠三さんは茨城県古河にあった乗員養成所で飛行機の整備士としても働いていた。そして、1945(昭和20)年7月10日仙台空襲により仙台市中心部は焼け野原となったのである。仙台市中心部に住んでいた鹿井さんの家も空襲により焼けてしまい、鮎川へ来た。鮎川には鹿井さんの母・あなよさんの兄がいて、そこを頼って訪れた。鮎川に来て一番初めは、一の鳥居のところにあった茶屋の建物を借りて2ヶ月ほど暮らした。そこから山鳥に移り、そこで6畳間と土間の倉庫を借りて3~4年ほど暮らしたという。鮎川に移ってきた当時、鹿井さんは尋常高等小学校の1年生であった。鮎川の尋常高等小学校に通うわけであるが、鹿井さんの妻・文子さんいわく都会から来た鹿井さんは着ている衣服から持っている持ち物にいたるまで鮎川の子ども達とは違っていたという。

その頃、傘なんて誰も持っていなかったもの。それに私たち、下駄はいて学校さ行っただけど、この人はちゃんと靴はいてたからね。

戦後、日本では深刻な食糧難に陥り、GHQはこの食糧危機を克服するために全国の漁船と捕鯨船に出漁許可を出した。鮎川では、戦時中から戦う国民の食料確保のために捕鯨は続けられていた。鯨肉は当時の日本の食料事情を支える重要なたんぱく源であった。鮎川浜で捕鯨に携わるひとびとは、最も使命感に燃え、海の男として生きることに誇りを持ち充実感を感じていたという。1947(昭和22)年には、鮎川町立鮎川中学校が設立されたり、黒崎開拓農業協同組合が設立され、戦後の復興へ向け歩み始めた。

3.2 大工修行時代

鹿井さんが鮎川に来て1年ほど経った頃、父・忠三さんが大工として再び働き始めた。当時は、鮎川では捕鯨が全盛期を迎える頃であり、町はにぎわいを見せていた。さらには、捕鯨のみならず、大謀網と呼ばれる大規模な定置網もかなり景気が良く、鮎川では小学校の教頭先生を辞めて漁師になる人までいたほどであった。鹿井さんも本当は捕鯨船に乗りたかったという。母・ゐなよさんの親戚に極洋捕鯨の捕鯨船に乗っている人がいて、“一緒に捕鯨船に乗らないか”と誘われていたそうだ。しかし、父・忠三さんについて大工をやるのがいいと思い、大工の道を選んだ。当時、鮎川にあった平山建築という工務店で父・忠三さんは働いており、鹿井さんも初めの2年は一緒に働いた。山鳥の家からまだ舗装されていない狭い道を毎日大工道具を抱えて歩いたのだという。仕事が終わるころにはすでに真っ暗で、周りは木が生い茂っていたため、月の明かりを頼りに空を見上げながら歩いたことが思い出されると鹿井さんは話す。

父の元での大工修行は厳しく、現場でも家でもかなり怒られたそうだ。父の厳しい指導は人前でもなされ、それがとてもショックだったという。しかし、父に厳しく仕事を叩き込まれたおかげで鹿井さんは鮎川では誰にも負けられない大工になれたと語る。

仕事はね、厳しかったよ。親父がすごく厳しい人で、家でもだけど、現場でもかなり怒られたね。現場なんかでは、施主さんがいるでしょ？ 施主さんだけでなく、いろんな人が見に来ていてもお構いなしで怒鳴りつけられて、はたきつけられてね。あれは悲しかったね。陰で怒鳴られるならいいんだけど、みんないるところでだもの…。

鹿井さんが趣味であるカメラと出会ったのもこの頃である。カメラは元々父・忠三さんが好きで、撮るだけでなく引き伸ばし機も自作し、自宅で行っていた。引き伸ばし機はレンズが2つ必要であったため、双眼鏡を解体しレンズを取り出して使った。枠は木で作り、大きな皿に現像液を入れ、押し入れの中で写真の引き伸ばしをしていたという。そんな様子を幼い頃から見ていた鹿井さんはおのずと写真に興味を持っていった。自分で初めてカメラを持ったのは18歳の時。当時、カメラは高級品であり、よく“お父さんに買ってもらったのか”と聞かれたそうだ。しかし、現場でもらうご祝儀を少しずつ貯めて自分のお金で買ったものだと言った鹿井さんは話す。大工見習いといっても、家を建てると施主からご祝儀がもらえる。棟梁より金額は少なくても、ひとりの職人としてご祝儀をもらえたそうだ。それをコツコツ貯金し、



初めて買った“ミノルタ”のカメラ（撮影：佐藤麻南）

仙台市中心部の一番町にあった「コセキ」というカメラ屋で初めてカメラを買った。

自分で初めてカメラを持ったのは18歳の時だったね。みんなからよく「カメラどうやって手に入れたんだ?」って、「お父さんに買ってもらったのか?」って聞かれたね。でも違うんです。その頃にはもう大工になってたから。大工ってというのは、家を建てる時と施主からご祝儀もらうんです。4人いたら4人それぞれもらえるんだよ。建前したらその日に1回、そして完成したら2回目。棟梁になると多くもらえるんだけど、そのほかの大工もそれぞれにももらえるんだね。それをコツコツ貯めて仙台に買いに行ったんです。一番町の「コセキ」というカメラ屋に買いに行ったの。

カメラを購入してからは、現場にも毎回必ず持って行ったという。そして、基礎ができたとき、上棟のとき、竣工のときなどのように家が出来上がる工程ごとに写真に収めていった。ときにはその写真を施主に渡すこともあり、とても喜ばれたそうである。

網地島で仕事しているときだったかな。捕鯨船がちょうどクジラを船につけて港に入っていくところが見えて、カメラ持ってたもんだから、「ああ!」と思って、仕事そっちのけで写真撮りに行ったんだね。親父も一緒に仕事してたんだけど、おれが写真好きなの分かってるから何も言わなかったんだ。もう夢中で写真撮ったね。1時間くらいは仕事そっちのけで写真撮ってたんじゃないかな。

鹿井さんが大工として修行を積んでいた時代、鮎川では捕鯨が最盛期を迎え、町はにぎわいを見せていた。1953(昭和28)年には鯨まつりが始まり、毎年多くの人が鮎川に集まった。鹿井さんもお祭りのときだけは仕事を休み、カメラを持って写真を撮りに出かけたという。そのなかでも鯨まつりの花火を写した写真は鹿井さんにとっても印象に残っているそうだ。毎年、当時鮎川中学校で先生をしていた人と一緒に、花火を撮りにでかけた。シャッターを開けっ放しにして、うちわを使い、



花火と捕鯨船 (撮影: 鹿井清介)

レンズにかぶせたり開いたりして花火を何発も重ねて撮影する。当時は毎年夢中になって花火を撮影したという。よく撮れた写真は貸してほしいと頼まれ、鮎川中学校に長い間飾られた。一緒に花火を撮ったというその先生は、当時最新だったアサヒペンタックスの一眼レフのカメラを持っており、すごくうらやましかったと鹿井さんは話してくれた。

写真の現像は、丸良丸の鈴木さんが家の蔵に暗室を持っていたので、借りて現像の仕方を教えてもらい、お祭りがあるとその日のうちに撮った写真のすべてを現像する。ときには夜通し作業していたこともあったという。



昭和30年頃の鯨まつり（撮影：鹿井清介）

鹿井さんが大工見習いとして修行を積んでいたころ鮎川では、捕鯨が最盛期を迎えていた。ほかの捕鯨基地とは異なり、鮎川には大洋漁業、極洋捕鯨など大手の捕鯨会社がこぞって事業所を設置した。金華山沖の漁場がいかに注目されていたかをうかがい知ることができる。鮎川には全国から仕事を求めて人が集まってきた。捕鯨船に乗りクジラを捕る人、揚がったクジラを解剖する人（鮎川ではクジラの解体を解剖という。）、捕鯨会社で働く人、鯨肥作りをする人、クジラの工芸品を作る人など多くの人がクジラにまつわる仕事をしていた。また鮎川では、大手の捕鯨会社による大型捕鯨とは別に、地元資本の家業としての小型沿岸捕鯨が行われていた。大型捕鯨とは異なり、鮎川沿岸で主にミンククジラを捕り、食用を目的としていた。これにより鮎川では、クジラを生で食べる文化が根付き、今でもミンククジラの刺身は鮎川の人たちにとってソウルフードとなっている。

町がにぎわいを見せていた1953（昭和28）年、初めて鯨まつりが開催された。消防団が中心となり町民一同が参画し、各地区の婦人会のメンバーが仮装をしたり、出し物をする。毎年各地区ごとに工夫を凝らした出し物が行われ、盛り上がりを見せていた。当時の様子は鹿井さんの写真からも分かる。多くの人が皆同じものを見つめ、楽しそうな様子が伝わってくる。

2.3 一人前の大工として

鹿井さんが一人前の大工として活躍し始めたころ、鮎川には5～6軒の大工がいたという。鮎川という狭い地域の中でこれだけ大工がいたにもかかわらず、皆忙しく働いていたようだ。それほどまでに鮎川は景気が良かったのである。鹿井さんへの依頼も多かった。近所の船主たちがこぞって鹿井さんのところへ来て、次々と家を建ててほしいと依頼があったという。最長で4年待ってもらったこともあったほどだという。

鮎川に大工は5～6軒いたんだよ。この狭い中にだよ。それでもみんな「清介、清介」ってね、辺り近所の船主さんたちがみんな鹿井にやってもらうんだって、お客さん来るんだから。



上棟の様子（撮影：鹿井清介）

そのなかでも鹿井さんにはこれまで建ててきた家のなかで忘れられない家があるという。鹿井さんが45歳（昭和52年）のときに建てた網地島の松尾丸、当時は船主の施主が多く、皆屋号で呼んでいた。たいていの現場は半年程度で終わるというが、この現場は着工から竣工まで1年かかった。家の設計から材料にいたるまでこだわって建てたのだと鹿井さんは話してくれた。現場は網地島であったが、これまでも網地島には何棟も建ててい

たという。むしろ鮎川よりも網地島の方が多かったほどだそう。急に鹿井さんのところへ「家を建ててほしい」という依頼の電話がかかってきた。そのときは施主のことを知らなかったというが、「いくらかかってもいいからセンガイ造りでどこにもない家を建ててほしい」という依頼をされた。驚いたのは、契約のとき手付金だといって見たこともないような大金を持ってきたことで、そこから当時の景気の良さがうかがえたという。

網地島の松尾丸、あれほど印象に残っている家はないね。松尾丸のことは知らなかったんだけどね、急に家を建ててほしいって電話がかかってきたんだね。契約のとき、港まで迎えに行ったんだよ。そしたらビニール袋下げてきて、魚でも持ってきたのかなと思ったんだ。家に着いたらテーブルの上にその袋置いて、手付金だって。大金が入ってたんだよ、ただのビニール袋に。あんな大金初めて見たよ。当時はね、かなり景気が良くて、網地島なんかは捕鯨より儲かってたんでないかな。

そのとき鹿井さんはセンガイ造りを知らなかったというが、唐桑でセンガイ造りで家を建てていると聞き、見に行ったら。カメラを持ち、大工ということは伏せて2日間かけて唐桑を回ったという。建築中の家を訪ね、現場の大工に「見てみたいから見せてください。写真撮ってもいいですか？」と声をかけたそう。どの現場も快く見せてくれたという。そこから約1ヶ月かけて図面を描き、材料は施主のこだわりで、青森ヒバを使うため、青森県の下北や津軽にまで調達に行った。材料調達のために青森には3回は行ったという。材木屋や製材所を何軒も回り、一番安くしてくれるところを探したそう。大間町奥戸にある高橋製材所というところが一番安く、さらには旦那さんと奥さんの人柄に惹かれ、決めたという。そこでトラックも手配してもらい、最終的に希望の半値で仕入れることができたという。高橋製材所で鮎川までの地図を描き、トラックで運搬してもらったという。

鮎川港からは石巻の丸本組の船を借りて網地島まで運んだ。いつもなら日本捕鯨の八竜丸を借りて運ぶそうだが、このときは木材の量が多く八竜丸では運べなかったのである。

島に下ろしてからは島民総出で木材を担いで現場まで運ぶ。網地島の場合は現場までの移送手段がないため、どの現場であっても、毎回島民総出で材料を運ぶという。とても大きい家だったので上棟するのも3日はかかった。そのくらい大きな家だったと鹿井さんは話す。工事中、普段であれば奥さんの文子さんが泊まり込みで鹿井さんをはじめとする大工、ほかの職人たちの食事の世話をするのだが、この現場では施主の空き家を借りて寝泊まりをし、食事もすべて施主が用意してくれたそうだ。工事中は、漁にも出ずにずっと工事の様子を見ていたといい、「ずっと見てたからやりにくかったね（笑）」と鹿井さんは話してくれた。

四方を海に囲まれ、耕地も少ない網地島では、人々は古くから漁業で暮らしていた。明治、大正、昭和にかけて長渡浜は沿岸漁業を中心として発展し、網地浜は昭和に入ってから遠洋漁業では県内一の先進地として近代的な資本制漁業を発展させた。大正期から昭和期にかけて日本では水産業界に漁船の大型化の気運が起これ、漁場も沿岸から遠洋へと拡大していった。三陸漁場へも関東、関西方面の大型漁船の姿が見られるようになり、網地浜では農林省の助成金を受け、県下に先駆けて大型漁船網地丸を建造して遠洋へと進出し、遠洋漁業の基地としての基礎を築いた。近代捕鯨の基地として栄えた鮎川に負けず劣らず、遠洋漁業で栄えていた。

3.4 大工引退

鹿井さんが大工を引退したのは55歳（昭和62年）のとき。回りからは早すぎると止められたというが、この歳になり高いところでの作業に恐怖を覚えたという。屋根の上での作業は若手の弟子には任せられない仕事であり、それができなくなったら引退するという鹿井さんのプロ意識があった。

大工を引退したあとは、風呂釜のセールスをしていたという。これまで職人一筋で生きてきたため、人と話すことは苦手だったそうだ。この経験があったからこそ今、自分の人生や写真のことを色々な人に話せるのだと笑顔で語る。大工は辞めても、出かけるときは必ずカメラを持って行く。「昔は残りのフィルムの枚数を気にしながら写真を撮っていたけど、今はデジタルだから枚数を気にせず撮れるからいいね」と話す鹿井さんが印象的であった。

1982（昭和57）年、国際捕鯨委員会により商業捕鯨のモラトリアムが採択された。それに伴い鮎川でも、産業としての捕鯨から観光としての捕鯨へとシフトしていくことになる。（佐藤）

4. 本報告書の構成

本報告書は、加藤幸治が全体編集を担当し、鹿井清介さんが撮影した写真とその背景に

ついでに調査と整理作業をまとめたものであり、全体のタイトルを「浜の棟梁・鹿井清介が撮影したくらしと祭り：鮎川浜 1950年代」とした。本報告書は、次の二つの内容で構成している。

最初の「鮎川浜の「黄金時代」の古写真と浜の棟梁・鹿井清介」は、鹿井清介さんの略歴と、1950年代の鮎川浜の概要について説明したもので、加藤幸治と佐藤麻南（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程）の共著である。鹿井さんの略歴部分は、佐藤麻南が製作を担当した東北学院大学博物館編『おもひで写真帖～今、蘇る鮎川～』（同館、二〇一八年三月三十一日）の紹介文を大幅に加筆修正したものである。

次の「写真引き 60年前の鮎川浜のすがた」は資料紹介である。ここでは、「鹿井写真」を佐藤麻南と加藤幸治が整理し、そのうち公開できるものすべてを掲載した。また、加藤幸治ゼミナール学生らが、二〇一七～二〇一八年にわたって現地での聞き取りによって収集したデータをもとにまとめたものである。この調査は、文学部歴史学科三年生開講の「民俗学実習」における調査の一環で行われ、鮎川浜のみなさんや特別養護老人ホームおしか清心苑の入所者のみなさんの協力を得て行った。これをもとに、加藤幸治・佐藤麻南・成澤正博（鮎川の風景を思う会）の共同作業で写真引きのデータとして整え、鹿井清介さんの掲載許可を得てここに掲載した。（加藤）

参 考 文 献

- 「牡鹿半島・思い出広場」実行委員会編 『日本画家・平山郁夫が描いた「金華山の朝陽」』 同実行委員会
二〇一七年
- 『クジラお宝珍物館』 同実行委員会 二〇一八年
- 『おしかがえし：ほみがであったむかしむかし』 同実行委員会 二〇一八年
- 加藤幸治 『復興キュレーション：語りのオーナーシップで作り伝える“くじらまち”』 社会評論社
二〇一七年
- KATO, Koji 2017 *The Story of Cultural Assets and their Rescue: A First-Hand Report from Tohoku*, Fabula 58 (1-2)
- 東北学院大学博物館編 『一人ひとりのくらしの風景がみえてくる』 同館 二〇一五年
- 『鮎川浜の賑わい：よみがえる 60年前の古写真帖』 同館 二〇一五年
- 『躍動する身体：よみがえる 60年前の古写真帖Ⅱ』 同館 二〇一六年
- 『くじら探検記：よみがえる 100年前の古写真帖』 同館 二〇一六年
- 『おもひで写真帖：今、蘇る鮎川』 同館 二〇一八年

写真引き

60年前の鮎川浜のすがた

鹿井 清介・加藤 幸治・成澤 正博・佐藤 麻南

加藤幸治ゼミナール

【3年生】

小笠原 涼・金 美乃里・菅原 美咲・畠山 稜平・矢葺 隼也・上野 果菜・
佐藤 達哉・佐藤 千夏・須佐佳奈子・渡邊 愛・菊谷 誠人・小池 和香・
佐藤遼太郎・鈴木 理沙・中嶋 瑞希・八木橋克顕

【4年生】

相澤 春希・赤間 大記・伊藤 彩華・小原茉莉子・川嶋佐知子・熊谷 爽佳・
三浦 衣織・杉内 香奈・菊池 平・真田 遼海・津花 麗・栗原 和輝・
長野 香純・松橋 元春・三浦 万帆・渡邊 拓也

凡 例

- ここに掲載する写真は、鹿井清介氏（宮城県石巻市鮎川在住）が一九五〇年代を中心に撮影した鮎川浜の写真である。写真は鹿井氏本人よりネガをお借りしてデジタル化したものと、成澤正博氏（宮城県富谷市在住・鮎川の風景を思う会代表）から提供されたプリントのスキャニング・データとを整理し、重複する写真を削除するなどして掲載するものである。ただし、極めてプライベートな写真については選別して非掲載とした。
- 写真を1. 風景、2. 捕鯨、3. 漁業、4. 鯨まつり、5. 暮らし、6. 金華山の6つのカテゴリーに分類し、IDは写真の分類上付けたものである。IDは6つのカテゴリーにそって付けた。
- 牡鹿半島以外で撮影された写真に関しては、写真の右下に撮影場所について記した。
- 写真引き（画像に番号を付けて注釈をつけたもの）は、加藤幸治ゼミナール3・4年生が鮎川浜で聞き書きを行って作成したものをもとに、加藤幸治・成澤正博・佐藤麻南が追記して作成した。

●写真 1-7



鮎川の沿岸部を旧牡鹿町役場付近の丘から撮影したもの。鮎川を一望するにはこの場所が最適だったという。しかし、埋め立てなどが行われたため現在同じ景色は見ることはできない。映画館や商店、捕鯨会社などが多くみられ栄えていたことが分かる。

- ①漁連の冷凍庫…大きい氷を削って漁船に積む。
- ②燃料補給タンク…船に積む燃料。漁業協同組合が貯蔵していた。
- ③映画館…鮎川映画劇場。上映されるのは任侠ものが多かった。二階建てでスクリーンはひとつ。次第に洋画も入る。
- ④栗野旅館…木造三階建の立派な旅館。前にバス停があった。旅館内で郵便局も経営しており、そこではバスの切符も売っていた。
- ⑤鯨館診療場…二階建ての建物で、一階が診療室、二階が病室だった。ここで診察しきれないほどの怪我・病気は牡鹿病院に行った。小野先生（内科）が診療していたので「小野医者」とも言った。
- ⑥役場…牡鹿町役場の屋根。
- ⑦バスの停留所…仙北鉄道バス（現在の宮城交通）の車庫だった。
- ⑧イトッコ屋…たたみ3畳ほどの小さな店。ところてん、カキ氷など量り売りをしていて、1円飴や味のついた紙（クジ）を舐めていた。ハマグリに甘い味付けをしたものも売られていた。
- ⑨海員寮…昭和二三年に設置された極洋捕鯨の寮（極洋会館）。昭和二五年には大洋漁業が「大鯨荘」を設置。
- ⑩畑…トミジさんの家の畑。大根、きゅうり、なす、ほうれん草、肥やしを肥料にしていた。天秤棒を使っていた。
- ⑪公民館…二階建てで大きい。北島三郎が公演で来たこともある。
- ⑫郵便局…昭和三四年に栗野旅館内の郵便局から移転した。その後再度移転し派出所となる。
- ⑬家…カクトさんの家。
- ⑭事業所…鮎川の戸羽捕鯨の事業所。
- ⑮鮎川橋付近にあった劇場…建つ前は、バラックの建物でござの上で見れていた。
- ⑯牡鹿病院…外科・内科。鯨館の後にできた。二階建て。
- ⑰大洋漁業の解剖場…飛行場の格納庫を払い下げて移築した大きな解剖場。地域の人々は鯨をもらいに行っていた。
- ⑱道路…木炭バスがギリギリの道幅で走っていた。
- ⑲鮎川橋…一九五七（昭和三二）年に完成。鯨まつりの時に仮装行列や鮎川音頭に合わせて盆踊りが行われていた。

●写真 1-40



港での日常を切り取ったある場面。コバルトライン開通後、観光客の車やバスなどが多く停まっている近くに肥料工場があった。一帯が肥料工場になっていたため、肥料の臭いが鮎川のおいとされるほどに満ちていた。肥料の臭いを最初は臭いと感じていたが、慣れたら大丈夫になったようだ。その臭いを「金の匂い」といって笑う人もいる。

- ① 棧橋…捕鯨船が着く棧橋。
- ② 看板…橋本の工場にある看板。「鯨まんぢゅう 長寿万重」の文字。実際に、ここでは鯨まんじゅうは売っていない。もともと名物を作ろうと鯨のように大きなまんじゅうを作ったのが最初。クジラの形をしているわけではない。鯨まんじゅうは、葬儀などにも重宝され、単なるみやげ物という以上に生活に欠かせないものであった。
- ③ 寺…観音寺。現在の本堂は一九六二（昭和三七）年に完成した。
- ④ 家…丸浄丸というミンク船を所持していた。
- ⑤ 家…鈴木文太郎さんの家。肥料工場を営んでいる。
- ⑥ 船…寿丸と銀星丸（鉄製）。
- ⑦ 船…船の先端にメロード漁用のアゾ木があるため、二、三月頃か。
- ⑧ バス…観光客用の観光バスと思われる。
- ⑨ 警察官…自転車で警備中のお巡りさん。
- ⑩ タンク…県魚連の油槽タンク。
- ⑪ 墓地
- ⑫ 駐車場…多くの自家用車が停まっている。たくさんの家族旅行客が、コバルトラインを通過して鮎川を訪れた。
- ⑬ 作業場…丸浄丸の解体場。
- ⑭ 建物…宮城県漁港事務所鮎川出張所。
- ⑮ 民家…昭和四〇年代でもまだまだ茅葺き屋根の民家が残っていた。

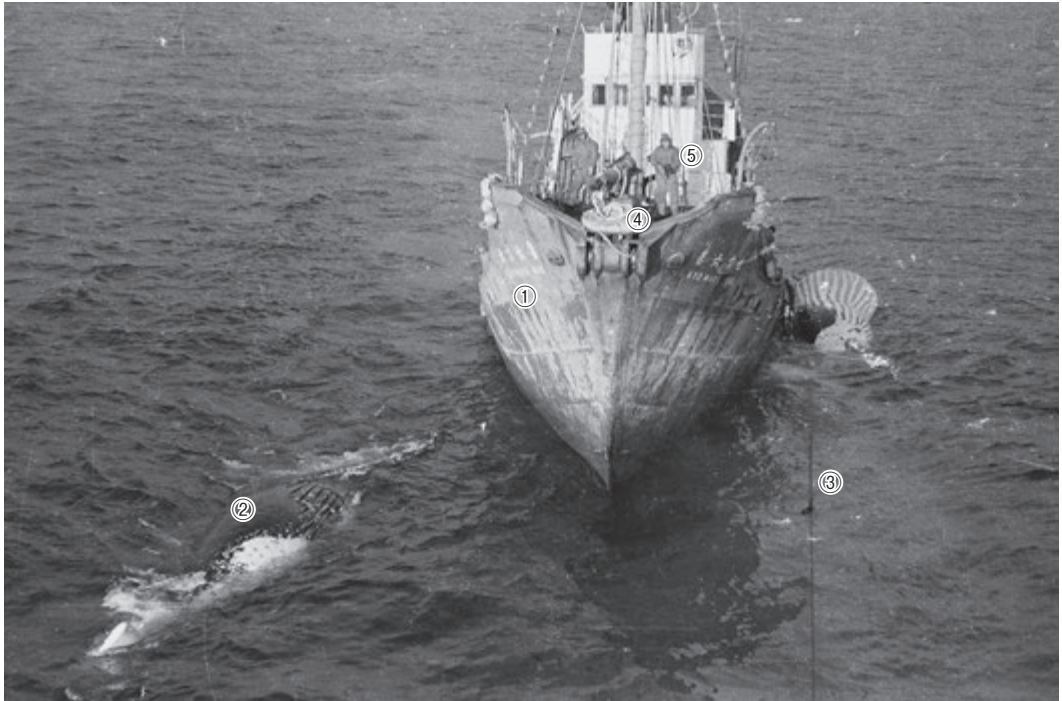
●写真 2-64



昭和三〇年代、鮎川は大型捕鯨の最盛期を迎え、最も景気のいい時期だった。三つの捕鯨会社があり昼夜問わず解剖作業が行われていた。鮎川をはじめ、小型のミンククジラとツチクジラを捕る船を「ミンク船」と言っており、約三〇トンクラスの捕鯨船だった。大型のクジラ（イワシクジラ、マッコウクジラ等）を捕る船を「捕鯨船」（キャッチャーボート、通称キャッチャー）と言っていた。この写真は大洋漁業（現・マルハニチロ）の事業所にあった解剖場の様子である。解体のことを鮎川の人は「解剖」と呼んでいる。

- ①クジラ…解剖途中。鮎川で捕るのはイワシクジラとマッコウクジラが主だった。イワシクジラー頭の解剖にかかる時間は約三〇分と驚くほどスピーディであった。
- ②長靴…床が油で滑るため、滑り止めつき。もっと昔はわらじだった。
- ③大包丁…肉と皮を鯨の体から切り離す際に使用する。大包丁を持っている人は後に、町の議員になった。
- ④チェーン…クジラをチェーンで引っ張りながら切った。
- ⑤床…クジラから出た油と血で光っている。
- ⑥ワイヤー…肉と皮の間に包丁で切り込みを入れ、そこにワイヤーを掛けて、皮を外した。大包丁・チェーン・ワイヤーを組み合わせる解剖は行われた。
- ⑦排水溝…血や油が流れていく。海まで続いたらしい。
- ⑧解剖後のクジラ…解剖されている。肉や骨全てに使い道があり、捨てる部位は肺くらいしか無い。
- ⑨小包丁…肉や皮を裁割時に使用された。鉤のような「ノンコ」も使用されていた。
- ⑩解剖所…危険なので一般の人は立ち入れなかった。ただ、入らなければよいので外から様子を見る人も多かったとか。この写真も外から撮ったもの。クジラの臭いが充満していて臭かった。クジラの解剖時の臭いの元は、腸から出る内容物であった。
- ⑪男性…クジラを解剖している。一頭の解剖には五～七人必要だった。

●写真 2-69



極洋捕鯨の第6京丸の写真である。クジラは死ぬと海に沈んでしまうため、捕獲後、体内に圧搾空気を注入しラジオブイを付け、また次の捕獲に向かう。ブイを付けたクジラは曳鯨船が収容して母船に渡鯨して解剖した。

- ①船…極洋捕鯨の第六京丸。乗組員は約二〇名。
- ②鯨…銆が撃ち外れると「ドンガラ」、一発で仕留めると「パンコロ」と言っていた。クジラが苦しまないように二番銆、三番銆も撃つこともあったという。
- ③ワイヤー…しとめた鯨を引っ張ってくるワイヤー。
- ④砲台…捕鯨砲を撃ち銆を飛ばすところ。ロープでつながっており、銆は返しが付いているので一度刺さると抜けなかった（鮎川で開発された平頭銆）。防波堤の付け根に練習台があった。
- ⑤船動員…船員さんは防寒具と防寒帽をかぶっており、南氷洋と思われる。戦後南氷洋捕鯨に従事すると当時は家一軒が建つくらいの収入があったと言われている。

●写真 3-17



オオアミと呼ぶ大謀網（大規模定置網）の水揚げ作業の様子。大謀網は初代町長である鈴木良吉の家で行っていた。場所は金華山沖で、男性中心に四〇～五〇人で働いていた。定置網の統括者をダイボウ（大謀）と呼んだ。

- ①大網…乗っている人が左に寄っているため、船もその方向に傾いている。網を引くときは全員で「ヨイトーヨイトー」と言った。
- ②男たち…また八～九割が岩手県宮古あたりの出身の人たちであり、出稼ぎのために来ていた。
- ③舟…作業用で魚を積み、エンジンのない舟を「ダンベ船」と言った。
- ④服装…鉢巻、合羽、アームカバーをしている。合羽、アームカバーに関しては海上での仕事のため、水を弾く素材だった。作業員はみな鉢巻をしている。
- ⑤つなぎ…船が離れないようにロープでつなぎをかけている。
- ⑥波…穏やかである。

●写真 4-9



牡鹿鯨まつりで行われる仮装行列出発前に、当時の牡鹿町役場の前で撮った記念写真。クジラのかたちをした山車は中央が開いてステージになる。写っているのは仮装した婦人会の方々と、鯨を解剖する大包丁を持ったり、丸眼鏡や帽子を被ったりしている。

- ① 鯨のオブジェ…紙で作っている。
- ② 婦人会の会長…「鈴喜商店傘」で鮮魚と塩を売っていた方。運送業もしていた。
- ③ 側溝…砂利道のためすぐに土が積もってしまうため、掃除しやすいように蓋がない。
- ④ 女性たち…北中地区の会社の女性だと思われる。鯨解剖の大包丁の作りものを持っている。他の女性たちは各自「阿部三商会」「鮎川港鈴喜商店」などと会社名の書かれた法被を身に着けている。
- ⑤ 学校の暗幕を借りてきた。
- ⑥ 牡鹿町役場…バルコニーがありモダンな建物
- ⑦ 万国旗
- ⑧ 荷車…太鼓などの楽器を運ぶのではないか
- ⑨ 子供達…運動靴とバックを持っている。当時としては珍しい。
- ⑩ 砂利道…傾斜で右側の方が高いのは道が舗装されていない砂利道のため。道路が舗装されるのは昭和45年のコバルトライン開通後から。

●写真 4-10



①

鮎川橋からメインストリートに向かって撮影された鯨まつりの写真。地面はまだ舗装されていない。舗装されていないところにこれだけの人が集まれば、砂ぼこりが舞っていたことであろう。

- ①撮影ポイント…鮎川橋の上から撮影。道幅は大体7~8m。
- ②リヤカー商店…リヤカーの修理・販売をしていた。後に下駄や塗料も販売。屋根はスレートで、2階からお祭りを見ている。
- ③住宅…カクトさんの洋風住宅。
- ④東洋館…お酒や薬を売る雑貨屋。「菊水」という日本酒を売っていた。ミネビタルという看板が見える。
- ⑤本間屋商店…雑貨屋。石巻の「福の玉」という日本酒を売っていた。ケーキや雑誌も販売。
- ⑥ヤマキ商店（鈴木のタナ）…有名な名物おかみさんがおり、魚や塩などを売っていた。また運送業も行い、後に酒販売の許可を取って酒を販売するなど手広く商売をしていた。
- ⑦鮎川電機商会…後の牧電機。
- ⑧呉服店…平岩呉服店
- ⑨洋品店…伊藤洋品店
- ⑩商店…フジヤ
- ⑪鳥家…大きい蔵を持っていた。
- ⑫鮎川映画劇場…鯨まつりの日は劇場内でも出し物をしてたか。
- ⑬七夕飾り…鯨まつりのためにみんなで作った。竹は金山地区の竹やぶから取って来る。飾りはあくまでも鯨まつりのための装飾であった。
- ⑭女性…証城寺の狸の仮装をしているのは体格の良い女性。
- ⑮白虎隊の仮装…地区ごとに婦人会の女性たちが仮装をする。看板には「花の白虎隊」とかいてある。
- ⑯侍姿の男性…パレードの順番待ちをしているのか。
- ⑰演奏隊…トラックの上でアコーディオンなどを弾く。

●写真 4-18



若い女性たちが、三輪トラックの荷台で楽しそうに花笠を踊っている。場所は鮎川橋付近で、踊っているのは鮎川南地区婦人会の方々。牡鹿鯨まつりではいつも女性が大活躍であった。トラックの上に乗ったまま鮎川中を移動し、目的地に着くとショーとして踊り、また次の目的地まで移動する。鹿井清介さんは、三輪トラックの荷台をはっきりと写すために鮎川橋の欄干から撮ったそうだ。

- ①三輪トラックの舞台…三輪トラックの荷台の上。移動しながら所々で停車し、ショーを行う。周りには子どもと同じくらいの高さのため、それほど高さはない。
- ②建物…銭湯の「鮎川浴場」。銭湯はもう一か所「鈴ノ湯」がある。
- ③男性…カメラを持ち、橋の欄干にあがり写真を撮っている。撮影者の鹿井さんも同じように欄干に上がっているため、この男性のカメラに写っているかもしれない。
- ④屋根…極洋捕鯨の捕鯨船員らが集う「極洋会館」の屋根。
- ⑤手ぬぐい…鮎川音頭の全歌詞が入っている。

●写真 4-22



牡鹿鯨まつりの仮装行列の様子である。西町地区の人々が仮装し練り歩いている場面であり、後ろの方では「ミス・西町」の女性三人組がドット（水玉）のワンピースを着て並んで歩いている。

- ①看板…「ミス・西町」の看板。「栄冠は私、応募者 5,000 人中から厳選 就職、嫁の口、養子」と後ろに書かれている。三人のミス・西町の女性がドット（水玉）のワンピースを着て並んでいる。
- ②看板…「祝鯨祭り、極洋捕鯨・大洋漁業」。
- ③行列…楽器を持った鼓笛隊のような仮装。
- ④道路…砂利道。水はけが良いように道の中央が盛り上がっている。
- ⑤トラック…装飾されたトラック。
- ⑥門…サカナのイラスト。
- ⑦装飾…裸電球がいくつも吊ってある。
- ⑧屋根…別の写真と比較するとリアカーの看板がなくなっており、別の年とわかる。
- ⑨懐中時計…男性の右ポケットに入っている。
- ⑩鮎川橋…一九五七（昭和三二）年完成。
- ⑪仮装…チンドン屋。ノリノリである。
- ⑫屋根…スレート屋根の建物。屋根を軽くできるため大きな建物によく用いられた。雄勝石や井内石で作られている。

●写真 4-23



牡鹿鯨まつりの仮装行列。鮎川橋前で撮影された、南地区の写真である。牡鹿鯨まつりは県内外から多くの観光客が訪れ、出店が出されるようになるとさらに賑やかなものになったという。仮装行列は各地区の婦人会がそれぞれ趣向を凝らして企画するもので、奥に見える旧牡鹿町役場からスタートした。仮装行列で練り歩くルートは日によって異なり、テーマもその時々で違ったという。中央にうつる女性は当時流行していたトニー谷の仮装で、こうした仮装で使う物は全て自分で調達していた。第一回鮎川鯨まつりに参加した人の話では、家一軒から必ず一人仮装行列に参加しなければならず、全員で作り上げるイベントといった雰囲気があった。

- ①看板…「祝鯨まつり」とある。
- ②女性…当時人気だったコメディアン「トニー谷」の仮装をしている。みなみ荘の女将さん。
- ③仮装行列…女性達が仮装をし、小太鼓などを鳴らしながら町を一周した。地区ごとに仮装のテーマは異なり、年によっても変化していた。当時は鮎川の住民だけではなく、牡鹿半島の表浜地区・裏浜地区の人々も参加した。
- ④前掛け…船の帆と同じ生地が使用されていたため「ほめかけ」（帆前掛けの意）と呼ばれていた。「宝城製菓」という石巻市の金昆羅通りにある菓子屋の名前が書かれている。電話番号は1929とあり、当時は四ヶタだった。
- ⑤そろばん…仮装の道具。「トニー谷」はそろばんを楽器のように鳴らす芸風であったため、仮装として大きなそろばんを持っている。そろばんは、この女性の娘が通っていたそろばん教室のものを拝借したという。
- ⑥笠…仮装の一部。笠の上に白い旗がたくさん刺さっている。
- ⑦旧役場…当時の牡鹿町役場。仮装行列のスタート地点。
- ⑧ナトリ自転車…自転車屋。リヤカーも販売していた。のぼりには「最高の品質」という文字がみえる。
- ⑨女性達…花笠を被っている。前の女性達とは格好が違うため別の地区の団体だと考えられる。のぼりに書いてあるのは「大漁花笠」か。
- ⑩お立ち台…ここで出し物を披露か。
- ⑪提灯…「金兜」という酒の名前が書いてある。金兜は石巻で醸造され、鮎川では本間屋・寿屋・菅井商店で販売していた。
- ⑫日傘…日差しが強いと思われる。影が短いことからお昼ごろだと予測できる。
- ⑬子ども達…大勢いる。母親などが行列に参加しているのか。
- ⑭観客…県内外から多くの人々が訪れていた。そのため宿泊業もかき入れ時だった。
- ⑮万国旗…当時は運動会などイベント時に必ずと言っていいほど使われた。
- ⑯洗濯物…祭りの最中でも、いつもと変わらない日常風景。
- ⑰子ども…建物の二階から祭りを見学している。

●写真 4-33



牡鹿鯨まつりの仮装行列の様子である。山車の船に「北中丸」と書いてあるため、北中地区の出し物だとわかる。捕鯨船を模した三輪トラックの上には乗組員の格好をした女性たちが乗っている。普段は男性の仕事である捕鯨を、仮装として女性たちが真似しているのだろう。

- ①女性…水夫長役。さか井の女将さん。ボースン（船の甲板長）の役になりきっている。
- ②装飾…捕鯨船を模した出し物。「北中丸」と書いてある。
- ③門…この祭りのために用意された。
- ④女性…婦人会の人が車をひっぱっている。
- ⑤女性…砲手役。
- ⑥女性…船長役。
- ⑦男性…上の障害物を避ける係。
- ⑧男性…漁師をしていた清松さん。
- ⑨国旗…国旗は学校からの借り物。
- ⑩日傘…晴れている。かなり暑そうだ。
- ⑪男の子…頭から顔まで包帯を巻いている。お祭りが好きで無理して来たのだろうか。
- ⑫男性…モダンな帽子を被っている。旧家の旦那役場の助役さんか。

●写真 4-35



牡鹿鯨まつり、映画館近くでの仮装パレードの様子である。近くに粟野旅館がある。映画館は鮎川の中心部にあった。

- ①七夕飾り…各自の店や、鯨まつり実行委員会で作成したものか。
- ②看板…映画のタイトル。看板には「大菩薩峠」と書いてある。菅原都々子さんが2回程訪れた。石原裕次郎時代の映画。
- ③仮装している人々…踊りながら移動している。ハタ屋の娘もいる。
- ④窓から覗く人…学生帽を被っている。中学生か。
- ⑤場所…写真 4-36 と同じ場所
- ⑥男性…鮎川に一軒の船大工。
- ⑦男性…ハシモトさん。消防団幹部、鮎川捕鯨社長の和泉恒太郎さんの息子さん。
- ⑧女性たち…大漁踊りを五十集（イサバ、魚売り）の服装で踊っている。
- ⑨男性…島さんの弟。ミナトパーマの旦那。
- ⑩看板…「パン 喫茶」の文字。フジヤさんの店。
- ⑪子供…こちら側に子どもたちが集まっている。
- ⑫建物…七十七銀行鮎川支店

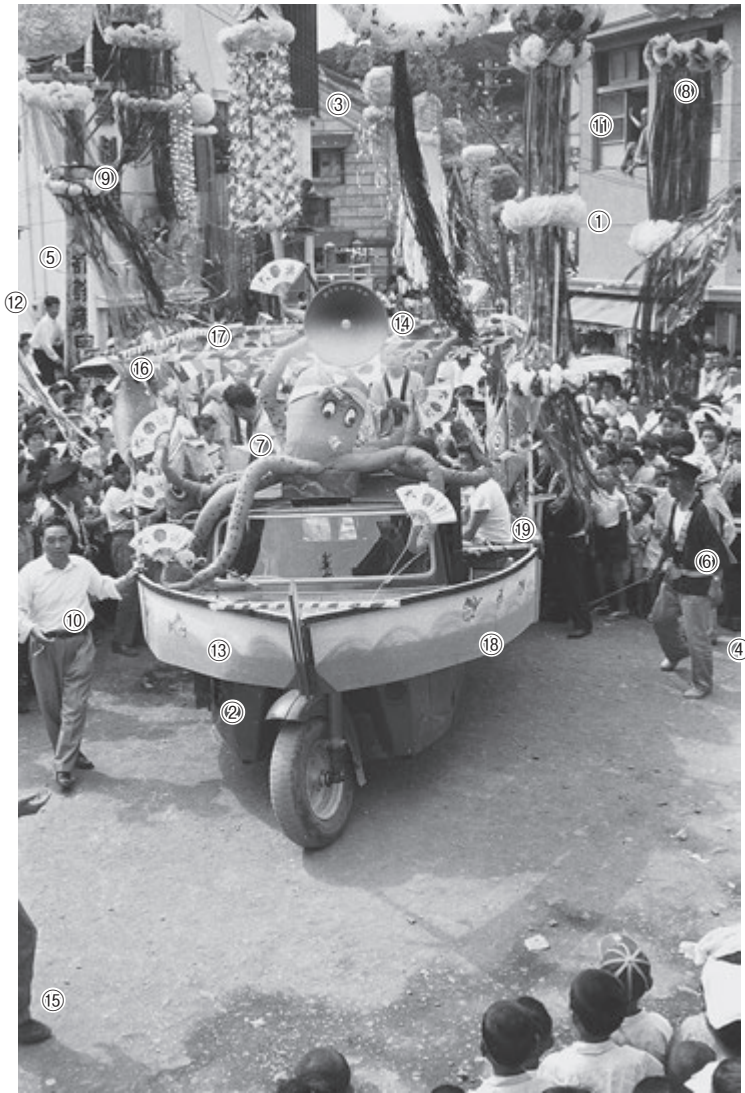
●写真 4-36



牡鹿鯨まつりの仮装パレードは南地区・金山地区・北下地区・北中地区・西町地区など地区ごとに行われた。この写真は南地区婦人会の方々の様子を撮ったものである。箱に魚を入れて売り歩く五十集の仮装をし、「民謡ばやし大漁道中」に合わせて踊っているようだ。奥に見える三輪トラックには「御囃子部隊」が乗っている。

- ①トラック…ヤマキさんのトラック。三輪トラックは鮎川に2台のみ。
- ②男性…チョウロクさん。
- ③男性…鮎川に一軒の船大工さん。
- ④飾り…南・金山・北下・北中・西町の地区ごとに仮装行列を行う。南地区のパレード。太鼓が乗っている。
- ⑤建物…七十七銀行。昭和25年に七十七銀行鮎川支店に昇格した。
- ⑥男性…ブントロウさん。肥料工場の方。
- ⑦飾り…ふきながし
- ⑧おはやし部隊…トラックの荷台に乗っている。
- ⑨消防団員…警備をしている。地下足袋のひと、革靴を履いてる人がいる。
- ⑩広場…この場所は通りが少し広くなっており、パレードは一旦ここで止まって踊りなどを披露する。写真の画角が高いため、この通りにあった粟野旅館の二階から撮った写真だと考えられる。
- ⑪子どもたち…女の子はおかつぱ、男の子は坊主とぼっちゃん刈。
- ⑫前列には、チヨちゃん、アサちゃんや、後列にはモトコさん、フキさん、ウサちゃん、タケコちゃんが躍っている。

●写真 4-39



毎年恒例の八月の牡鹿鯨まつり、午前中の鯨まつりの仮装行列の様子。一九五〇年代なかばの粟野旅館前広場の写真である。子供や大人たちの和気藹々とした雰囲気が伝わってくる。影がはっきりと地面に写っていることや女性が日傘を差していることから、とても天気の良い夏の日だったことが窺える。中心で目立っている三輪トラックには手作りの様々な装飾がなされており、大きなタコを中心に鯉のぼりのようなものや万国旗が吊るされている。トラックの側面には波と魚のイラストなどが描かれておりとても派手ににぎやかである。スピーカーも付いており、そこから音楽や鮎川音頭などを流しているのだろう。周りには多くの人が集まっており、車を誘導する役場職員・消防団員・商工会員の人達が正面に写っている。

- ① 藤屋商店 (サイトウさん)…看板には「パンと喫茶」の文字。2階は住まいで、1階では和菓子か洋菓子を販売していた。鮎川では、まだクリスマスケーキが普及するまえからこうした店舗でケーキが販売されていた。奥津商店よりも古くからの店だといい、後に肉屋・惣菜屋となる。
- ② 三輪トラック…ヤマキさん (魚屋) のトラック。鮮魚と塩を売っていた。肥料工場、運送業も行ってた。鮎川では、こうした運送業者や工場で、早くから三輪トラックが行き来していた。
- ③ 倉庫…ミンク船 (地元の人々が操業するミンクジラの捕鯨船) の船主だった鳥さんの石蔵。塩釜石でできている。
- ④ 道路…右側には金華山の一の鳥居 (女人禁制の時期からの遥拝所) への道。舗装路以前の砂利道だった。
- ⑤ タジラ館診療所…鮎川の診療所の看板。診療所は公民館の裏にあり、もともと戦前に作られた鯨館 (展示施設) の場所に立っていたためこの名がある。
- ⑥ 消防団員…お祭りの警備をしている。消防団員の他にも役場職員や商工会員の人達が祭りの警備をしていた。
- ⑦ 飾り…タコは婦人会の手作り。足に持っている扇子には「大漁」の文字。
- ⑧ ふきながし…七夕のふきながし。裏の通りにもふきながしがあり、お祭りに合わせて装飾。仙台七夕にならって、にぎわいを生み出すために牡鹿鯨まつりでも派手に飾られた。
- ⑨ 壁文字…「劇場」の文字。これは映画館で、町として栄えた鮎川の娯楽として人気を博した。劇場としても使われ、牡鹿鯨まつりでは歌手のショーや演芸が催された。
- ⑩ 引率…沿岸の観客が出てこないように警備をしているのか。
- ⑪ 男性達…三人の男性。人が多いからか、家の二階から見ている。
- ⑫ 男性…人混みで何かに乗って仮装行列を見ている。
- ⑬ 荷台…三輪トラックに装飾をつけて荷台に人が乗っている。
- ⑭ スピーカー…アナウンスを流しながら仮装行列を先導していた。
- ⑮ 足…人影があるためトラックを誘導している。警備員が周りに多くいる。
- ⑯ 旗…魚の形。こいのぼりを転用か。
- ⑰ 万国旗…運動会の万国旗。
- ⑱ 絵…波と魚のイラストが描かれている。
- ⑲ トラックの上の男性…鮎川電機商会のオヤジ。

●写真 4-44



昭和 30 年頃の鯨まつりの写真。高い位置から撮影されており、障害物が全くないことから、鮎川漁協前の岸壁に停泊していたミンク船の上から撮影されたものと思われる。当時船には、地元の人であれば自由に乗ることができたそうである。

- ① 鮎川魚市場…2 階には事務所がある。鯨まつりの様子を見ているのは、漁協関係者の家族などではないか。
- ② 鯨館診療所の看板…パレードのトラックの幕で隠れている。小野先生が診察していたため、小野医者と呼ばれていた。診療所は別のところにありこれは看板のみ。小野先生はスクーターに乗って、町内を回診していたようだ。
- ③ 奥津まんじゅう…製菓店。鯨まんじゅうを販売していた。中にはぎっしりあんこが入っていた。網地島の人たちが鮎川に来た時にお土産、贈答品としてよく購入していった。
- ④ ミス西町のパレード…10 代くらいの女子が当時かなり珍しいミニスカートをはいて、踊っている。よく見ると、シニア世代の女性もミス西町として乗っている。
- ⑤ 西町パレードの警備…消防団の人で、法被、もんぺ、地下足袋を身に着け、警察官の帽子をかぶり警備をしていた。法被には「おしか」の文字が入っていることから、この写真は昭和 30 年の牡鹿町合併後の写真と思われる。
- ⑥ パレードを見物している観衆…下駄を履いている人が多い。当時サンダルはハイカラなもので、下駄が主流だった。また日傘をさしている人も多い。写真の手前側は海になっており、岸壁ぎりぎりまで人が立って見物していたようだが、海に落ちる人はいなかったようだ。
- ⑦ ゲート…通常「歓迎」の文字が書かれているが、鯨まつりに合わせた仕様になっている。昭和 28 年の写真にはゲートには映っておらず、それ以降に設置されたものではないかと思われる。ゲートの柱には魚の絵が描かれている。
- ⑧ 焼き鳥友ちゃん (酒蔵)…友ちゃんが経営しているお店。
- ⑨ 電柱…昭和 16 年に鮎川に変電所ができて以来、一般家庭にも電気が普及した。木の電柱は防腐剤替わりにコルタルが塗ってあり、触るとべたっとして手が黒くなった。木の電柱は平成に入ってからもあった。電柱には防犯灯がついていて、町が管理をしていた。各行政区で防犯強化費が徴収され、球が切れたりするところのお金が使われた。
- ⑩ 仮装した女性…おそろいの法被とはちまきを身に着け、しゃくじょうを持っている。どや節を歌っていた。

●写真 4-45



昭和34年(1959)頃に海岸通りで撮影された鯨まつりの写真である。南国にあこがれた女性たちのハワイアンの仮装を収めた1枚。写真に写る子どもたちの服装がとても都会的であることから当時の好景気がうかがえる。

- ①丸本組の鮎川事務所…その後飲み屋などへ店舗が変わっていった。
- ②中華料理店上海楼…鮎川支店の看板が見える。本店は石巻市横町(現在の住吉町あたり)。今の店主は横浜中華街で修行してきた。半チャンラーメンがおすすめ。「波の音」の看板(石川酒造店)が見える。
- ③今留商店(こんとめ)…クジラの買い付け、小売りを行っていた。クジラが揚がるとブロックで鯨肉を買い付けしてきて、店で一晩中小分け作業を行っていた。昭和60年代まで小売りを行っていた。この前は粟野旅館の近くに店があった。その前は粟野旅館の斜め向かいの空き地でボン菓子をやっていた。
- ④鈴吉汽船の荷捌き場…石巻から来た荷物をリヤカーで配達したり、受け渡しを行っていた。今でいう宅配収集センターであった。鈴吉汽船は今の石ノ森漫画館の向かい側に船着き場があって、そこから船が出ており十八成を経由して鮎川と石巻を行き来していた。荷捌き場のところにパチンコ屋の看板があるが、パチンコ屋は荷捌き場の裏にあった。パチンコ屋は元々「すずのゆ」という銭湯であった。
- ⑤鮎川釣り具センター…スズキの代理店でもあり、自転車の修理をしながら釣り具も売っていた。奥の方に「ヨコハマタイヤ」と「ブリヂストン」の看板も見える。
- ⑥かきあめの看板…喜栄で売っている。かきあめは高価であった。カキエキスが入っている。他にも大玉でカラフルなザラメがついた飴玉もよく食べていた。
- ⑦万国旗…鯨まつりのための装飾。
- ⑧女性…ハズレ(屋号)の奥さん。
- ⑨女性…鮎川電機商会の奥さん。
- ⑩女性…チヨちゃん。
- ⑪阿部喜のスタンドのマーク…鯨歯工芸店の千々松さんの家の隣で本店は女川にあった。船へ向けて重油を売っていた。防波堤のところにパイプがあって、そこに船を横付けして、燃料を補給していた。氷も売っていた。
- ⑫八竜丸漁業の解剖場…八竜丸は牡鹿町長も務めた渡辺諭さんが創業した。ミンク船や旋網をやっていた。
- ⑬パレードを見物している子どもたち…下駄などではなく、運動靴を履いている。服装も都会的である。
- ⑭見物人…足が見える。2階から見物する人がいたようである。
- ⑮少年…水風船を持っている。出店で買ったものか。
- ⑯ハワイアン…南国にあこがれた女性たちの仮装。

●写真 4-109



牡鹿鯨まつりの夜に行われる名物・花火大会。花火が始まると海岸いっぱい人が集まった。花火大会はだいたい二時間程度で、花火は何回も船を往復させてあげていた。打ち上げ花火と一緒に水中花火をあげている。当時の鯨博物館前から湾内に向けて撮った写真で、迫力のある花火が画面いっぱいに写っている。鹿井清介さんのお気に入りの一枚。

- ①水中花火…「タネ」を水中に落とし、時間になると花火があがる。鮎川には花火師がいなかったため、花火は「芳賀火薬屋」が作っていた。花火師専用のボートがあり、それに乗って花火を海に流していたという。船は花火を落としてすぐにその場を離れないと巻き込まれてしまうので、操縦を任されるのは腕が確かな証拠だった。
- ②重なる花火…カメラのシャッターを「開放」にして、うちわをレンズに被せたり開いたりすることで、花火を何発も多重露光して撮影した。
- ③捕鯨船…大洋漁業の捕鯨船（キャッチャーボート：通称キャッチャー）隣りは極洋捕鯨の第二おとり丸。
- ④大洋漁業のマーク…「㊦」と書いてある。当時の大洋漁業（現・マルハニチロ）の前身「(株)林兼商店（はやしかねしょうてん）」の屋号のマーク。大洋漁業は北洋の鮭・鱈事業を行っていたが、南水洋捕鯨に進出するようになった。
- ⑤棧橋…花火を間近で見ようとする人でいっぱいである。
- ⑥橋…ランナーブリッジといい、ブリッジ（船橋）と砲台に固定されたつり橋状の橋。砲台の所へ直接行ける歩道橋。砲手（通称：テッポウさん）が主に通る通路。

●写真 5-31



浜の棟梁・鹿井清介さんの家族写真。仕事の合間に作業小屋（バラック）で休憩している。鮎川では休憩することを「たばこやっぺす」と言う。日の差し込み具合から午後三時の休憩であろう。

- ①帽子…耳当てつきの帽子。紐で結んである。
- ②電動のこぎり…木を切る道具。上下するハンドルで木材の厚さを決める。
- ③機械…建具の穴を振る機械。
- ④干し柿…アンボ柿。
- ⑤野球帽…「A」というマークの野球帽。当時は捕鯨会社ごと、役場や工場などの職場ごとに野球チームがあり牡鹿鯨まつりでは野球大会が開かれた。さながら実業団リーグのような様相を呈していた。
- ⑥おやつ…リンゴを剥いている。野球帽の青年も食べている。
- ⑦おやつ…漬け物だろうか。子どもが興味を持って手を伸ばしていてかわいらしい。
- ⑧ほっかむり…かつて女性は作業をするときに必ずほっかむりをして、着け方や模様の見せ方などでちょっとしたオシャレをした。

●写真 6-44



金華山の初巳大祭の神輿渡御の様子である。鮎川の若者達が神輿を担ぎ、清めの塩を撒いた道を進む。観客も多く、邪魔にならない場所で見学をしている。現在は港湾の岸壁が整備されているが、当時は道からすぐに砂浜に降りることができた。

① 公衆便所

② 休憩所…鈴吉汽船の無料休憩所。石巻と鮎川、金華山などを定期船で結んでいた。

③ 看板…「鈴吉汽船株式会社」とある。

④ わらじ…切れたり落ちたり持って帰る人も。二足、三足と用意していた。

⑤ 担ぎ手…本来は二〇歳の男性が担ぐ。鹿井さんは一九歳と二〇歳のときに担いだ。当時は鮎川の人だけが担いでいたので人が足りなかった。

⑥ 神輿…普段は神輿蔵に安置されているが、一年に一度これにご神体を移して浜へ降りる。

⑦ 観客…金華山講のある山形・福島・岩手からの来客が多かった。

⑧ 塩…お清めの塩をまいた所を神輿が通る。

⑨ 牡鹿消防団の団員…当時から共同・共助の意識が強く消防団員も多かった。神輿渡御の警護にあたっている。秋になると「カマド調査」を行い、団員が毎戸のカマドの使用状況を調査して歩いた。

●写真 6-45



金華山の棧橋近くで撮られた初巳大祭の写真。若者や観光客が多く見られる。神が力を蓄える為の浜降りと塩汲みの儀礼のときの写真。

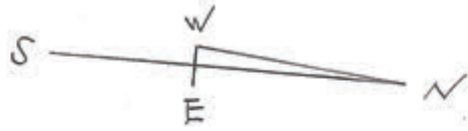
- ①建物…御旅所の横の社務所。
- ②御旅所
- ③箱…餅屋のアイスクャンディー。
- ④担ぎ手…神輿の担ぎ手が休憩している。服が濡れていることから浜降り後の様子だとわかる。現在は各浜から担ぎ手を出して協力して神輿渡御を行うが、当時は鮎川の男性だけで神輿を担いだ。
- ⑤見学者…女性や子ども、生徒などが見物に来ている。

●写真 6-56



一九五三（昭和二八）年一月に撮影された、一の鳥居から金華山を拝んでいる写真である。金華山はもともと女人禁制であったため、女性はここから参拝した。近代以降は解禁されたが、この頃はまだ島に渡るのを遠慮する女性も多かった。

- ①人物…左から叔母、従兄弟、叔母の従兄弟。
- ②縄…正月に注連縄をかける。
- ③景色…当時は立木がほとんどなく金華山がよく見え、三六〇度景色が見えたという。周囲は黒松の松林であった。
- ④扁額…「金華山」とある大きな扁額。
- ⑤地面…東日本大震災以降はとくにシカの生息域の拡大によってヤマビルがいたるところに潜んでいる。
- ⑥島影…海峡を挟んで臨む金華山。



鮎川港



昭和 30~40 年代の鮎川浜の街なみ (作成: 成澤正博)

1. 風景

旧鯨博物館前、ケンジ墓、御番所公園など鮎川には町並みを一望できる場所がいくつかある。これらの場所から鹿井さんは鮎川の風景を何度も撮影している。中にはパノラマ写真のようにつながるものもあり、60年前の鮎川の様子がよく分かる。



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



1-7



1-8



1-9



1-10



1-11



1-12



1-13



1-14



1-15



1-16



1-17



1-18



1-19



1-20



1-21



1-22



1-23



1-24



1-25



1-26



1-27



1-28



1-29



1-30 のり浜



1-31



1-32



1-33



1-34



1-35



1-36 黒崎



1-37



1-38



1-39



1-40



1-41



1-42



1-43



1-44



1-45 網地島



1-46 網地島



1-47 網地島



1-48 網地島



1-49 網地島



1-50 網地島 木村旅館



1-51 網地島から鮎川を望む



1-52 網地島長渡港 久丸



1-53 女川港

2. 捕鯨

1906（明治39）年、東洋漁業株式会社が鮎川に初めて捕鯨基地を設立したことがきっかけで始まった捕鯨業は、昭和30年代ピークを迎える。鹿井さんが写真を撮り始めた頃、鮎川はちょうど捕鯨のピークを迎え、仕事を求めて全国から集まってきたたくさんの人びとでにぎわっていた。町には独特のクジラのおいが常に漂っており、いつも身近にはクジラがあった。港にはクジラをかかえた捕鯨船が昼夜を問わず入ってきた。そんなクジラの町・鮎川ならではの風景・町並みが映し出されている。



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



2-24



2-25



2-26



2-27



2-28



2-29



2-30



2-31



2-32



2-33



2-34



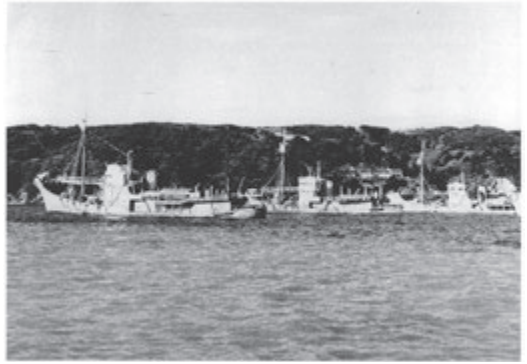
2-35



2-36



2-37



2-38



2-39



2-40



2-41



2-42



2-43



2-44



2-45



2-46



2-47



2-48



2-49



2-50



2-51



2-52



2-53



2-54



2-55



2-56



2-57



2-58



2-59



2-60



2-61



2-62



2-63



2-64



2-65



2-66



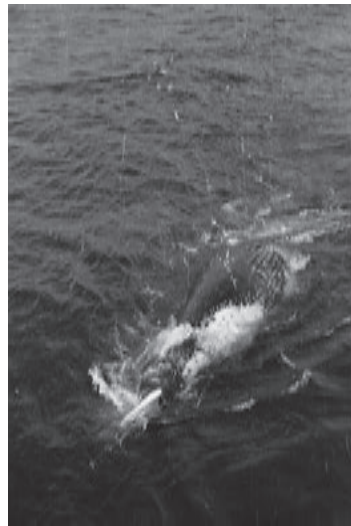
2-67



2-68



2-69



2-70



2-71



2-72

3. 漁業

世界三大漁場である金華山沖を有する鮎川は捕鯨業とともに漁業も盛んであった。大謀網と呼ばれる大型定置網漁が行われた。一攫千金を夢見て海で働く男の姿が収められている。



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7



3-8



3-9



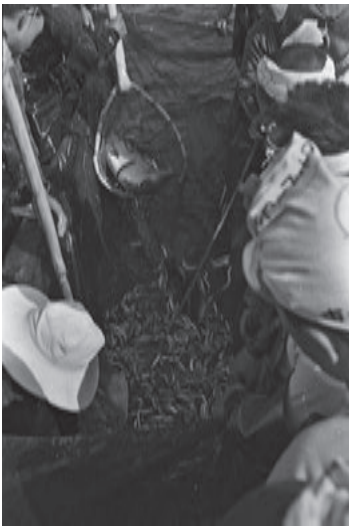
3-10



3-11



3-12



3-13



3-14



3-15



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21



3-22



3-23



3-24



3-25



3-26



3-27

4. 鯨まつり

昭和28年（1953）、初めて鯨まつりが開催された。消防団が中心になり、町民一同が参画し、各地区の婦人会のメンバーが工夫を凝らした仮装パレードが行われるようになった。鮎川の人びとは毎年この日を心待ちにしており、仕事を休み祭りに参加する人もいたという。町の外からも見物客が押し寄せ、当時の好景気を象徴する祭りであった。



4-1



4-2



4-3



4-4



4-5



4-6



4-7



4-8



4-9



4-10



4-11



4-12



4-13



4-14



4-15



4-16



4-17



4-18



4-19



4-20



4-21



4-22



4-23



4-24



4-25



4-26



4-27



4-28



4-29



4-30



4-31



4-32



4-33



4-34



4-35



4-36



4-37



4-38



4-39



4-40



4-41



4-42



4-43



4-44



4-45



4-46



4-47



4-48



4-49



4-50



4-51



4-52



4-53



4-54



4-55



4-56



4-57



4-58



4-59



4-60



4-61



4-62



4-63



4-64



4-65



4-66



4-67



4-68



4-69



4-70



4-71



4-72



4-73



4-74



4-75



4-76



4-77



4-78



4-79



4-80



4-81



4-82



4-83



4-84



4-85



4-86



4-87



4-88



4-89



4-90



4-91



4-92



4-93



4-94



4-95



4-96



4-97



4-98



4-99



4-100



4-101



4-102



4-103



4-104



4-105



4-106



4-107



4-108



4-109



4-110



4-111



4-112



4-113



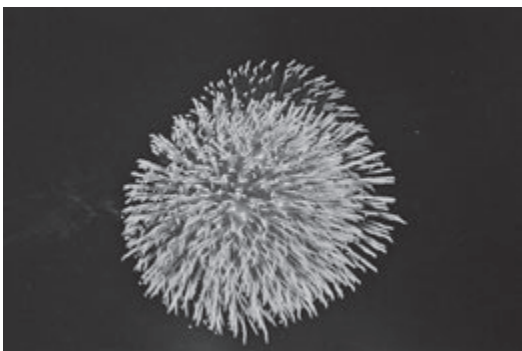
4-114



4-115



4-116



4-117



4-118



4-119



4-120



4-121



4-122



4-123



4-124

5. 暮らし

当時カメラを持つ人はまだいなかった時代、どこへ行くにもカメラを持つことを忘れなかった鹿井さん。時には仕事中でも夢中になって写真を撮り続けた。熱狂する鯨まつりとは対照的な鮎川の穏やかな日常風景が映し出されている。



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-15



5-16



5-17



5-18



5-19



5-20



5-21



5-22



5-23



5-24



5-25



5-26



5-27



5-28



5-29



5-30



5-31



5-32



5-33



5-34



5-35



5-36



5-37



5-38



5-39 山鳥の堤防



5-40 山鳥の堤防

6. 金華山

蛇を使いとする弁財天を祀る金華山・黄金山神社。金華山講が組織され、鮎川の人びとだけでなく県外からも参拝に訪れる人が絶えなかった。毎年5月には1週間かけて初巳大祭が行われる。鮎川の若者は神輿を担ぎ、地元の捕鯨会社も無料で見物客を金華山へ渡した。初巳大祭のにぎやかな雰囲気、金華山の荒々しい自然、対照的な2つが写真に収められている。



6-1



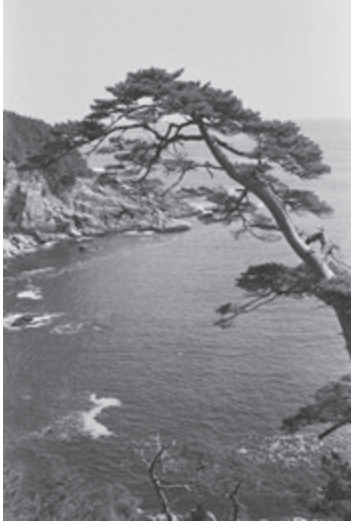
6-2



6-3



6-4



6-5



6-6 千畳敷



6-7 千畳敷



6-8 千人沢



6-9 千人沢



6-10 千人沢



6-11



6-12



6-13



6-14



6-15



6-16



6-17



6-18 仁王崎



6-19



6-20



6-21



6-22 金華山ホテル



6-23 金華山ホテル



6-24



6-25



6-26



6-27



6-28



6-29



6-30



6-31



6-32



6-33 天柱石



6-34



6-35 金華山灯台



6-36



6-37



6-38



6-39



6-40



6-41



6-42



6-43



6-44



6-45



6-46



6-47



6-48



6-49



6-50



6-51



6-52



6-53



6-54



6-55



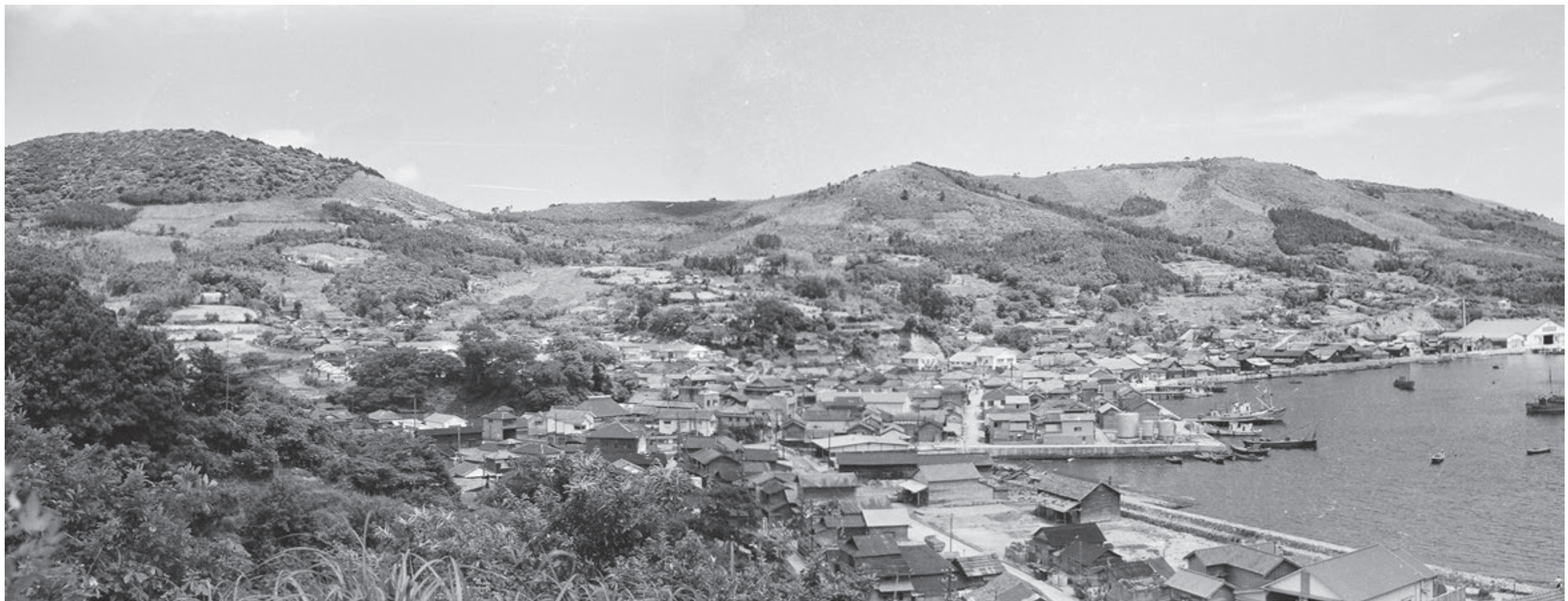
6-56



6-57



㊦の事業所と煙突、そして昭和41年建設の漁民アパートが写っており、これからコバルトラインが開通し、鮎川が捕鯨から観光へと移り変わる節目の風景写真です。(成澤)



昭和35年頃の鮎川の風景写真ですが、なぜか写真から温もりが伝わり、心に残る風景です。(成澤)



港内に日本近海捕鯨のキャッチャー「第2勝丸」が停泊しており、全体にのどかさが感じられる風景です。(成澤)



コバルトライン開通により一挙に車と観光客が押し寄せました。(成澤)



金山の田んぼや鮎川小学校と鮎川中学校のなつかしい校舎が写った風景です。(成澤)



現在より緑が多く雄大な金華山。(成澤)